学校だより　令和3年度　1月号

なつのくも

第148号（R4．1．7）　練馬区立光が丘夏の雲小学校

本校ホームページ
携帯・スマホ用サイト
でもご覧ください。

元日や　今年もあるぞ　大晦日　（二宮尊徳翁）

校長　牧 野 光 洋

明けましておめでとうございます。令和４年が始まりました。「元日や　今年もあるぞ　大晦日」この句は、かつてはどこの小学校にも在った、薪を背負って歩きながら本を読んでいるあの像の二宮尊徳翁が詠んだとされています。貧乏の中で育った二宮尊徳翁（金次郎）は、大変な働き者で頑張り屋でした。朝早くから夜遅くまで働き通しの金次郎少年は、仕事の合間、ほんのわずかな時間も使って勉強をしたそうです。成人してからは、貧乏な村を立て直したりする今で言えば会社の再建家または有能な経営コンサルタントと言ったところでしょうか。しかも実践的な人格者でもあり、数多くの素晴らしい教訓や逸話が残されています。その一つに、あるとき翁の下男が使いに行く途中、腹痛を催して道ばたのトイレを借りたそうです。そのトイレの持ち主は、大酒飲みで博打好き、身を持ち崩しておりました。そのためトイレもおんぼろで下男が不用意に柱代わりの竹竿に手をかけたところトイレが倒れてしまったようです。持ち主が大変激怒していますと、翁は「トイレがその有様ではおそらく母屋も傾いているだろう。」と仰って大工さんを差し向けてトイレ、母屋を修繕したそうです。驚いたのは持ち主の方で、自分の愚かさを恥じて真人間に立ち戻ったという話が残っています。

→

さて、おめでたい元日にその年の最後である大晦日のことを考える人はいません。しかし、昨日の大晦日にはしみじみと一年を振り返り反省していたのに、一夜明けて元日にはもう忘れてしまって…、というのもよくある話です。二宮翁は「一年の終わりの大晦日を、遠い先のことだと思っていると、一年を台無しにしてしまうぞ。」と警告しているようです。さらに、これは一生のことを言っているかも知れません。まだまだ先は長いと徒に月日を過ごしてしまうと、人生の大晦日に至って、後悔では遅すぎます。幸せや成功にしても、ある日突然空から降ってくるというものではありません。社会の至る所で開いている人生の落とし穴に落ちないようによく考え用心をし将来を予測して努力を積み重ね、ようやく手にするものです。「先のことは、まあなんとかなるだろう。」では困ります。今の社会だからこそ、今年の大晦日も、さらには人生の大晦日にもニコニコ笑顔でいられるように「恕」の心を念頭にしっかりと地に足をつけて、脚下照顧で参りたいと思います。